

幸田露伴の『一国の首都』研究

—北原白秋『柳河首都建設論』と 正岡子規『400年後の東京』とあわせて—

和田 宗春*

Key Words : 自覚, 江戸っ子, 自我同一性/アイデンティティ

はじめに

私は平成 25 年 (2013) 6 月に幸田露伴著『一国の首都』⁽¹⁾ を現代語訳している。

露伴の書いたこの本がかねてから存在し、露伴なりの個性としての主張で貫かれていることは承知していた。明治時代の創成期に、官僚や学者でもない一文学者が首都とそこに住む住民に対する注文を明記することは異端である。このように先駆的な発想を持ち得た露伴の発想の原点については、露伴の『少年時代』⁽²⁾ を参照して欲しい。

さて東京都の議員を勤めていた関係もあり、まさに一国の首都がどのようにあるべきかを課題としてきていた。歴代の都知事や都議会議員は首都としての東京を常に意識しつつ、地方都市とは異質の都市構造と住民意識を心がける習慣が出来上がっていた。

国内の他都市とは比較にならない産業、人、情報の集中は、国際都市としてロンドン、ニューヨーク、パリなどとも比較されつつ、その構造、便利さ、安全、清潔が問われてきている。このように東京が国内外の他都市とは異なる存在であるという宿命はどこからきているのか。先進諸国に追いつくために近代国家としての制度や法律などの整備を急ぎ、明治維新後の政府関係者の海外主要都市への派遣、留学などが大きな動機になっている。

明治維新の不平等条約の改正時期に、鹿鳴館を利用して諸外国の要人を接待したように、追いつけ追い越せ精神が日本人、都民の脳裏に焼きついて国民性にまでなっているような状態である。

露伴の原書を訳してみて、東京都の 2020 年のオリンピック、パラリンピックの招致につい

* 人間学部

での国民的、都民的感情の特性としての江戸ッ子精神を露伴は見抜いていたと思う。

さらに文学者としての露伴の首都論に直接関わりを持つものではないが、明治時代同期や大正時代の文学者の都市論・首都論について正岡子規、北原白秋の二人の記述を中心にして比較検討する。

なお本書について国際日本文化センター教授 白幡洋三郎、詩人、評論家 大岡信は論文と規定している。

1 首都東京誕生の経緯

明治維新が成立してから東京の町作りはどのように進められていったのであろうか。

明治元年（1868）3月に江戸薩摩藩邸（港区）で、官軍の西郷隆盛と旧幕府の勝海舟の会談が行われ、いわゆる無血開城が成功したのである。すなわち江戸がそれまで蓄積してきた江戸城を中心とした統治、文化などの機構が破壊されずに、温存されたということである。ここで歴史上にあらわれた遷都論、奠（てん）都論について触れておきたい。

新政府にはそれまで大久保利通らの大阪遷都論、もとより京都存続論もあった。明治元年（1868）3月には前島密が東京遷都論を、同じく4月には佐賀藩士の大木喬任と江藤新平が、西の京に対する東の京、すなわち東京を改置するという『東西両都論』⁽³⁾を岩倉具視に建白している。また同時期に木戸孝允は京都すなわち帝都、大阪すなわち西京、江戸は東京とすることを建言している。この時期に要するに数多くの遷都論が朝野を問わずに噴出してきた。

265年の長期政権が倒れたのであるからそれまで鬱積していた反発や発想が一気に出てきたのである。江戸時代には象徴としてまた形式として朝廷があり、実質は江戸幕府の支配であった。この微妙な二重構造が長期政権を作ってきた。新政府内もそれが維新によって形式も実質も朝廷に一本化されたわけであるから両者を取り入れる東西両都論が妥当であるかに傾いた。同年四月に東西両都論を政府決定している。そして明治元年（1868）7月17日、まだ完全に統括しつくしていない関東、東北、蝦夷の支配を徹底させるために、関八州鎮將をつとめている三条実美や大久保利通らと協議して明治天皇の東幸を決定していた。その詔書は江戸を首都とする必要を簡潔に記している。

江戸ハ東国第一ノ大鎖、四方幅湊ノ地、宜シク親臨以テ其政ヲ視ニベシ、因テ自今江戸ヲ称シテ東京ニセン、定朕ノ海内一家、東西同視スル所以ナリ⁽⁴⁾

このことによって「東京」と呼ばれるようになったのである。

2 奠都（てんと）への道

同年8月27日に明治天皇の即位式が京都御所で行われ、9月8日に「明治」と改元されている。明治政府が旧幕府をはじめ旧勢力に対して恐怖や不安を感じ、神経を使い早急に統括体制を整えようとする姿勢がはっきりと見受けられる。それと諸外国からの圧力を阻止し、殖産興業を急いだのである。その後9月に明治天皇の後である京都にいた昭憲皇后が東京に行くことが発

表された。天皇も東京にいき、皇后までも、となると「遷都され京都は都でなくなる」という京都市民の危機感があり、東京ゆき反対の要望書がでる始末であった。京都府は次の年、天皇も戻って大嘗祭をやることとなった。しかし予定されていた翌年、明治3年（1870）には戊辰戦争と凶作のため、天皇の還幸は延期され、今日まで続いている。京都の財界を中心に天皇を京都に呼び戻す運動があるのは、これを根拠としているのである。さらに東京都の『東京百年史』⁽⁵⁾は東京遷都といわずに東京奠都と表現している。「遷都」は都を移すことであるが、「奠都」は新しく都を建設することである。東京は京都から都を移したのではなく京都の他にもう一つ都を造る「奠都」という形をとったのである。

3 新首都の地政上の統治力

265年の長きにわたって江戸の首都機能を担ってきた支配の構造は新政府にとっても否定できない蓄積であった。先に述べたように、何よりも天皇の所在地が確定しないという新政府の基盤の不安定さの中で、旧幕府に変わる政権を早急に機能させなければならない。よって必然的に明治政府は追い込まれた。旧幕府勢力も牽制しなければならない迅速性が求められていた。そこで新政府は旧幕府の江戸における蓄積された知識や行政管理方法を活用したのである。まだ国情が不安定で、内乱があちこちで暴発している時である。

明治元年（1868）5月には戊辰戦争が抗争中であったが、行政府としての江戸府が設置された。あくまで旧幕府の治安対策を急ぐことが目標であった。また同年五稜郭の戦いもあり戦いながら新政府を樹立する忙しさも加わった。

このように地政上の江戸すなわち東京は、日本の南北のほぼ中心に位置して全てに効率的であった。

4 新首都と旧幕臣の行政能力

さらに人材としてもすなわち明治政府の官僚も旧幕臣から登用していった。

明治政府の官僚の構成からみて旧幕臣から移転した数はどのようになるのであろうか。

明治5年（1872）の『官員全書』を分析した『江戸時代への接近』の中の三野行徳が書いた「幕府官僚と維新官僚」⁽⁶⁾によれば、当時の明治政府の官僚4145名のうち旧幕臣は1299名（約31%）であった。薩長土肥出身者は886名、約21%で、明治政府の実務を旧幕臣が担っていたことになる。省庁別の旧幕臣の割合をみても、外務省が38%、大蔵省が43%、海軍省が34%、文部省が32%など国家の中枢を占める省庁で30%を越している。

明治政府ではまかないきれない人材、そしてその能力、組織への忠誠心などは旧幕府によって受け継がれてきた人間力であった。明治政府も人材を留学させたり、視察させることで文明開化の努力をするのであるが、まず国内を治めていく目の前の対応の多くは旧幕府が培ってきた二百六十五年の伝統に頼らざるを得なかったのである。

以上見てきたように、江戸幕府から明治政府に政権は変更されたが、人材の変更はなくその

まま継承された。

5 藩邸跡地の利用

東京に首都を定めてその運営を考えたときに、江戸の区域の60%を武家地が占有していた、その大部分は大名屋敷であった。明治2年（1869）の藩籍奉還で放棄されたあと、敷地はどのようなになったのであろうか。⁽⁷⁾

新政府の官庁は藩邸跡地を利用している。主なものを上げてみる。

外務省	旧福岡藩邸
大蔵省、内務省	旧姫路藩邸

さらに旧幕府の大名の庭園はほとんどそのまま活用されている。

浜離宮（中央区）約75000坪	旧徳川家
小石川植物園（文京区）	旧徳川家

などとなっていて幕府の所有する土地を没収、活用することで急ごしらえの新政府の首都としてのたたづまいを糊塗していたのである。

さらに勝海舟がまとめた江戸時代の財政資料『吹塵録』⁽⁸⁾の中の「江戸人口小記」によると、幕府関係者が東京から立ち退いたために、人口も激減している。徳川慶喜が明治2年（1869）に静岡に移住したがそれに従った幕臣は14000家、国元に帰った諸大名や家臣が20000家、横浜へ移住した江戸町民は5000から6000家といわれている。諸大名が国元へ家臣とともに移住してしまった東京は、60%を占める武家屋敷の多くが空家となったわけである。

このような時に東京全体をどのような町にするのか、といういわゆる都市計画、首都計画が出されねばならないのだが、東京府知事の大木喬任は殖産興業を優先した。明治2年（1869）の当時、我が国の外国貿易の輸出品は生糸とお茶であったので藩邸跡地に桑畑、茶畑を推奨した。藩邸跡地の払い下げ、貸付などが行われ開墾が進められていった。しかし省の配置が進み行政機能が拡大したので、この開墾事業は第4代東京府知事由利公正によって廃止されたのである。⁽⁴⁾ 都市計画は日の目を見ることはなかった。

第1章 正岡子規の400年後の東京

偶然にも正岡子規と幸田露伴は同年の明治32年（1899）に、東京または首都についての評論あるいは意見を公にしている。子規のそれが『400年後の東京』⁽⁹⁾である。

子規の東京論を点検する前に、子規が小説家を断念することに露伴が関わっていたことに触れておきたい。

明治17年（1884）に東京大学予備門に入学した正岡子規は一時政治に意欲を持っていたが、坪内逍遙の『当世書生氣質』を読み衝撃を受けて学生時代に取材し、同18年（1885）に『龍門』を書き、同23年（1890）に『銀世界』を回覧し、夏目漱石らの批評を受けている。同24年（1891）に、

露伴の『風流佛』に感動し、小説『月の都』を執筆した。露伴を訪ねて批評を求めたが、露伴の「覇気強し」という感想に子規は落胆している。子規は俳友の高浜虚子への手紙に決断を書いている。

僕ハ小説家トナルヲ欲セズ

詩人トナランコトヲ欲ス

さらに俳友の河東碧梧桐にも弁解をしている。

人間よりは花鳥風月のほうが好きや

こうして正岡子規の歴史に残る俳句への傾斜、没頭が始まっていくのである。

1 子規にとっての故郷

後に触れる白秋の故郷への思慕と同じく、子規のそれを探ってみる。

明治28年(1895)10月6日の新聞「日本」⁹⁾に「故郷」という題で子規の原稿が掲載されている。子規はまず「世に故郷ほど恋しいものはない」と切り出している。「学問のためとか富が得られる」という理由ではなく、「住みたいところ」である。「母親の乳房」をたとえに出し、「離れがたい」という。故郷が近づくと、まず「城の天守閣が見えるが、これが嬉しい」といい、風景をいとおしむ。さらに「身内を訪ねて、年老いたり痩せたり太ったりした婆婆様、おじ、おば、下女らが少しも変わらないことに気が安まる」、子規はこの後も近隣の人や風景の変化、墓所の周囲のたたずまいについて書いている。そして最後に次のような歌で締めくくっている。

嬉しきも故郷なり悲しきも故郷なり悲しきにつけても嬉しきは故郷なり

子規にとって故郷はかつての思い出の姿であり、少しずつ変わっていくのを面白く、変わらないと見えながら変わっていくことを聞いたり見たりして、ゆかしいといっているのである。

2 神田川と東京湾の400年後

今でも正月の新聞各紙に初夢のような、未来の夢物語と言えるような空想記事が載るものである。新年という寿ぎのあらたまつた縁起めいた書き方の記事を見ることがある。

明治32年(1899)の新聞「日本」の元旦号に子規の『400年後の東京』が掲載され、駿河台、御茶ノ水周辺の400年後を描いている。同35年に没する3年まえ、32歳の時である。実はこの時、『400年前の東京』と同時に掲載されている。『400年前の東京』では四ツ谷、浅草、銚渡、甲山、銚の渡などを「武蔵野の平原八百里と称す。山がちなる日本の国に大きな都府を置かんとならばことならではあらじ。」として首都を置くならば、武蔵野の東京しかない、といっている。山地の多いわが国では関東平野のこの場所が適正である、と断定する。さらに続けて空想、未来といった年初めの初夢のような記事がある。太田道灌などの歴史から書き始めている。

『400年後の東京』は神田川、東京湾を取り上げながら未来の姿を描写する。

「圖中、三重に橋を架す。中なるは今の御茶ノ水橋の高さにあり、屋上最高の處に架したるは高架鐵道にして、最下にある者亦一般の通路なり。…」以下略⁹⁾

神田川沿岸の建物は上層、下層を昇降機（エレベーター）を使用して移動している。そこには旅館、割烹店、喫茶店、百貨店など的高级店が集まり、カラー写真館もある。人間社会のすべての贅沢が集っている。400年を待たずに120年経って子規の予想通り、今の水道橋、神田川周辺は大変化している。子規の想像力には驚嘆する。

この神田川の項は次の歌で終わる。

「おちゃのみず うてなたかどのたましけど しなぬくすりをうるみせはなし」

このように栄えてみえても死を防ぐ薬は400年後もないのだ。もちろん死が3年後に迫る子規自身にも結核の完治薬はない、といているのだろう。

東京湾についても次のように記している。

「隅田河口は陸地を広げて品川沖は殆ど埋め盡くさんとす。されど最新の式に憑りて第4回の改築を行ひたる東京湾は棧橋櫛の歯の如く並びて、林の如き帆檣安房上總の山隠したり。…」以下略⁽⁹⁾

港湾は海上の市街であり、すべての必需品は商船が商う、と言っている。この東京湾の項も次の歌で終わっている。

「よのなかに わろきいくさをあらせじと たたせるみかみ みればとうとし」

悪い戦争を否定する子規の平和主義が垣間見られる。

東京湾の有様も、今日に当てはまっている。平成の現在に世界航路の客船や貨物船が息つく暇なく東京湾を利用している。確かに病床にあって絶大な想像力を駆使して、東京を思い描いたのであろう。

子規の感性の鋭さである。ところで子規は、明治25年（1892）12月に陸羯南の経営する日本新聞社に入社している。

明治28年（1895）4月には清国にも取材で上陸し、一ヶ月ほど滞在している。子規は政治家に関心を持っていたが、『病状譚語（びょうじょうせんご）』⁽¹⁰⁾にあるように、「政治家とならんか、文学者とならんか、われは文学者を択ばん」としている。視野を広くもっていて探究心の強い青年であり、すでに結核を患っていたが、中国にまで行って仕事をする意欲もっていた。

3 松山と東京

故郷思いの子規は故郷と東京を比較している。

明治22年（1889）12月に松山出身者でつくる「松山会」が上野で開かれたことが同年の『筆まか勢』⁽¹¹⁾にある。その会場で「余は予てよりこしらえ来たりし東京松山比較表を読み上げたり」とも記されている。『筆まか勢』には以下のように、けなげな比較をしている。また『病床六尺』などにも表現されている。

東京	松山
宮城	松山城

内閣	県庁
警視庁	松山警察署
帝国大学	松山師範学校
隅田川	石手川
山王	道後八幡
大丸	米周

子規は東京と松山を比較することによって故郷についての優劣を言おうとしているのではない。ただひたすらにいま離れている松山を想い、そしてたまたま、宮城と松山城、内閣と県庁、というように比べてみることであった。東京に松山の町のあれこれを当てはめてみると大きい小さいなどの規模、豪華さなどはともかく、わが松山も捨てたものではないと客観視しているのである。子規の余裕とかゆとりとも感じる。また続けてこうも書いている。

「ある人がこの表を見れば、すべての点で松山が劣っていることを認めた上で、山王神社と道後八幡神社では道後八幡が勝っていること、また別の人は松山にあって東京にないものが二つあり、それは道後温泉と緋ノ蕪だ、といった。そこで大笑いとなり、松山会始まって以来の盛会であった」。

故郷を離れて東京の華々しい都会生活をしている時、発達心理学者エリク・H・エリクソンの「自我同一性（アイデンティティ）」としての自分、子規と松山の関係をなつかしむのである。故郷も、城、学校、川などが立派に残り、いつでも迎えてくれる。その暖かさが子規の松山論である。

第2章 北原白秋の柳川首都建設論

北原白秋（隆吉）は明治18年（1885）、福岡県山門郡沖端村（今の柳川市）に生まれたことになっているが、実際は1ヶ月前に熊本県玉名郡南関で産声をあげている。

白秋は矢留尋常小学校、柳河小学校（柳河は柳川市になるまで使用）、県立中学伝習館、早稲田大学英文科予科と進んだ。『邪宗門』を処女詩集として発表し、創作童謡の発表の場であった『赤い鳥』の創刊にも協力している。また多くの童謡を発表している。

白秋の柳川にもつ愛郷心は熱烈なものがある。柳河藩祖を祀った三柱神社の山道の入口には石碑がたっている。

その詩文は

「水郷柳河ここは、我が生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。

この水の構図この地租にして、はじめて我が体を生じ、我が風は成った」と記している。この故郷を思慕する心はどこから由来するものであろうか。

1 「自我同一性（アイデンティティ）」のもたらすもの

白秋は、慶応3年生れの露伴とは20歳ほどの年の差があるが、明治も20年代までは幕府の色合いも残っていて、断髪令は明治4年（1871）、廃刀令は明治9年（1876）という時代である。まだ265年続いていた封建制の基本である家意識、藩意識が残っていて、その圧力が解かれたから、と言ってすぐさま自由になって浮遊することは出来なかったに違いない。それまでの「自我同一性（アイデンティティ）」としての幕府、藩との関係が断ち切れるものではない。それまでのすなわち幕藩体制の側からの力は消えたはずであるが、住民の側からのつながり絆は個々人の選択によるものである。それまでの幕藩体制を忌む人も受け入れていた人も、いざ自分で判断してよい、とされた時に軛（くびき）を解かれた牛馬のように軽々しく判断、行動が出来たであろうか。白秋は故郷柳川に郷愁を強く持つ人間であった。

2 大正デモクラシーの旗手

白秋は明治の空気を30年間吸って大正デモクラシーの文芸の旗手と言われた白秋は、大正元年（1912）を27歳で迎えている。明治42年（1909）に『邪宗門』を処女詩集として発表してから、大正7年に創刊された『赤い鳥』では童謡面を受け持ち、千遍におよぶ童謡を発表した。創作童謡に新しい世界を開いた。

白秋の個性を培った明治から大正の時代の中で、大正3年（1914～1919）の第1次世界大戦、大正6年（1917）のロシア革命などの国際社会の変貌、尾崎行雄などが先頭にたった第1次護憲運動、第2次護憲運動もあり社会や政治も活発に広がっていく過程にあった。しかしここで着目しておきたいことがある。それは人間は確実に3、40年前の時代やその生活に影響を受けている。すなわち慶応3年生れの露伴は徳川の末期30年の生活風習や教育に慣らされているということである。この世代の連結性によって今日まで私たちの歴史は継続してきているとよい。明治時代後半に、政界や実業界で活躍してきた人々も露伴と同じである。町の塾に通い、書道や漢文の読み下しを習うことなどは、かつての武士の子、町民の子にへだてはなかった。露伴の語る明治になっての『少年時代』にそのことが記されている。その才能や環境は異なるにしても、時代の巡り合わせは誰にも等しく光を当てるものなのである。そのような時代背景の中で、白秋は多数の文学活動のうちにあつて、『柳河首都建設論』を公表しているのである。福岡県の地元紙である『柳河新報』⁽¹¹⁾に掲載されている。大正11年6月24日号にある。

3 白秋の『柳河首都建設論』の立場

白秋はこの『柳河首都建設論』の中で、「来る可き日本の首府」について、「私はこの柳河の地、ことに筑後川と矢部川の流域、佐賀と久留米と柳河との三角圏内が来る可き日本の首都たるべき、即ち東西両京に対する南京の地とよていしてしてゐる」と書き出している。そして「日本は西に南に膨大す可き形勢にある。今にしても東京の地は東に偏し過ぎてゐる。東京遷都は

一に徳川討滅とその政治継承, 二に露西亜に脅威に対して北を抑へる必要があったからである。然し今日は既に朝鮮台湾を併せ, その勢力は満蒙, 西伯利亞 (シベリア), 南支那に及び, 遠くヒリッピン, 交趾, 暹羅, 南洋, 印度, 豪州等の脅威と為ってゐる。従て帝都は今後南へ南へと移るであろう。」と展開している。この態度表明の文章こそ, 世代論すなわち人の誕生する前の一世代 (約 30 年) 前の時代の仕組みとか香りとか影響を映し出すということにあてはまるものである。すなわち白秋の明治 18 年 (1885) 誕生から 30 年前というと安政 2 年 (1855) になる。その 30 年前後の教育体制を始め家族関係, 社会秩序など影響を考慮して, さらに大正デモクラシーの状況も合わせて判断すると, 白秋の態度表明は極めて分かりやすい。

大正デモクラシーは日露戦争終結明治 38 年 (1905) から満州事件または五・一五事件までの大正を中心とする「戦間期」の時代思潮を指すという説もある。白秋が作詩も新首都建設も自由に論じ, 主張することに異論をはさむ時代背景はない。われわれ戦後教育を受けてきたものにとっては, 自由や平等は制度からも実生活からも保証されている。しかし平成の今から 90 年以上前に、「詩人が大臣になることが欧露なみに当然である」と主張する思想の背景があったことに驚くのである。まさに封建制度の高気圧の圧力鍋の中で馴致された生活をしてきつても, 時代の動きを正確に把握している大正人の姿である。そして柳河が柳河であるべき必要性を高らかに論じているのである。白秋は「柳河は今のまま保守しつつ, 新しい文化の母郷とならなければ」という。二者択一の保守や革新, 墨守や革命とも違うそれぞれの良さを折衷する, 一見合理的で落ち着きやすい妥協を示している。この合理的な姿こそ皮肉にも後の世の史家から批判されるに大正デモクラシーの柔軟さである。腰のすわらなさ, 格好の良さ, 粘り強さの欠如が指摘される場所である。楯の両面である。

幕藩体制の藩への求心力の強さは, 大政奉還された後でも, あれこれ論ずるほど若弱なものではなく, 統制が強いものであった。まして地方の藩の封建性にはまだ力があつた。そのなかでの白秋の柳川首都論は注目すべきである。

4 日本をめぐる国内外情勢

この当時の時代背景をみると, 大正 4 年 (1915) 1 月に, 日本は中華民国に 21 か条要求を突きつけている。それまでドイツ権益であつた山東半島を日本が継承する交渉の過程で, 同盟国の英国にも秘密にした条項もあつて, 中国はもちろん欧米列国にも日本不信が広がっていった。この時の加藤高明外務大臣が軍や経済界の高圧的な要求を抑えられなかったのは, 大正デモクラシーを支えとした日本の世論が強硬論となつていったからである。これも大衆世論を礼賛する民主主義の軽々しさと一致する。

白秋の故郷柳河建設論は一面において, 大正デモクラシーの自由で束縛を解かれた気風の具体的なあらわれである。しかし一面では「柳河は八幡や大牟田とは違います。それを思わない柳河の人なら禍です」⁽¹²⁾と白秋がいきるにおよんで, 自由を通り越して偏った柳河ナショナリズムにまで高揚している危険がある。

私は地方には地方の特色があり、それを生かしたいいわゆる地方自治があることが好ましいという立場である。徳川幕府においても数百以上の藩がそれぞれ独白色を出しつつ藩運営をしていた。具体的にはそれぞれの特産物、風土史などが残され現在も景観や産業として個性ある町となっている。しかしこの白秋の柳河第一主義、優先主義は度を越していると言わざるをえない。故郷を奮励し気を高めるといふには苛烈すぎるといえよう。

このように柳河を愛するあまりの強調されすぎた導入部のあとに一転して現実的な町村合併である「柳河、城内、沖端あるいはその周辺の村々の一部に部を加えて、市として大柳河と成りうべき十分な要素をもっています」⁽¹³⁾として将来の市への昇格を前提にした白秋の都市計画論すなわち「柳河首都論」が提言される。

なお1880年ごろから幕末以来の不平等条約改正のために、欧州の町並みを作るための都市改造が論じられたが、今の都市計画の概念ではない。森鷗外も『市区改正論略』を著している。白秋のこの当時は「市区改正」といい「都市計画」とは言っていない。ちなみに大正8年（1919）に都市計画法が公布されてから現在使われている都市計画という概念が出てきた。

第3章 『一国の首都』

1 幸田露伴という人物

幸田露伴は昭和12年（1937）に第1回文化勲章を受けている作家、考証家である。この作家があることか東京についての、首都についてのあり様やそこに住まう人間の気構えについて意見している。作家とは個人作業であり、まして明治初期、中期までは自然主義が主流となっていた。この時代の代表作家とはよく紅露遺鷗といわれる。尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外である。それぞれが日本文学の発展に大きな功績を残している。

国家的な評価としての文化勲章を受けているのは幸田露伴だけである。このようにわが国の文学では屈指の存在である。思想的には百科全書派のように森羅に通じていた。

2 『一国の首都』掲載の不思議

それだけにとどまらず、ここで取り上げる『一国の首都』では町づくり、都市計画などにも付言しようとするのである。最終的に明治32年11月までの数年にわたって発表したものである。しかし私が現代語訳に参照した岩波書店版のこの表記に白幡洋三郎は疑義を唱えている。雑誌『新小説』に数回にわたって掲載され、最終回は明治34年3月号になっているというのである。明治32年（1899）11月の岩波書店版と異なっている。白幡説が正しいと思うのだが、岩波書店の対応を待ちたい。

露伴は電信学校で学び、電信技師、電話交換手になるための電信修技学校を卒業し、北海道余市に赴任している。もとより建築、工学ではないが、今で言う電気工学の初歩は身につけていたに違いない。大切なことは理工学的な物の見方、思考方法が身につけていたと思われる。

露伴が小説にありがちな感情、感覚、情念といったいわゆる形而上の事象に偏らず形而下の事象を著作にもとりあげていることにつながっている。

『一国の首都』で、露伴は首都の首都に生活する人間のあるべき姿を強調している。なぜに作家としての露伴が、江戸から東京に変わって首都やその住民の生き方、考え方にこだわりを持つのか総論的に言えば、都民の自覚、江戸ッ子気質、それとしばしば触れる自我同一性（アイデンティティ）との関係まで関連してくる。

まず江戸幕府から明治政府に変化していく政治的な過程という大状況を、次に露伴の個人的な出自、環境を検討していきたいと思う。そこに見えてくる江戸時代から明治時代に押し流されていった一般庶民の姿を、江戸幕府に共鳴するというより、明治新政府の不安定さに危惧をもつ露伴を通じて明らかにできるであろう。

3 江戸ッ子気質

幸田露伴が明治32年11月までに書き終えた『一国の首都』は、江戸、東京に対する愛情を前提にしている。その上で自覚、江戸ッ子気質、物事に積極的に当たる意欲をもって、首都を守り造っていくことを唱えている。

たとえばその『一国の首都』の中で“自覚”については4頁の間に25回も繰り返されている。この執拗さはどこから来るのか。同じく『一国の首都』で用いている“べらぼうめえ江戸っ子だい”の江戸ッ子精神は、露伴の家が代々旧幕府の江戸城に登場する大名の食事の世話係を務めるお坊主衆であったことと無関係ではない。ちなみに江戸ッ子について触れてみよう。

江戸学者の西山松之助があげる、江戸ッ子の5つの条件⁽¹⁴⁾がある。

- 1 お膝元の生まれ。金の鯨（しゃちほこ）をにらんで、水道の水を産湯に浴びてお膝元に生まれている。
- 2 金ばなれがよい
- 3 乳母日傘で高級な育ち
- 4 生粋江戸っ子のはえぬき
- 5 「いき」と「はり」を本領とす。

一言で言えば斜に構えて、抵抗精神があることである。

お坊主衆に「江戸ッ子」が馴染むかどうかはともかく、露伴に一貫するのはこの意気なのである。この意気を、江戸時代、明治時代を生きてきた人々に求めているのである。

明治になってもかつての江戸の人間は卑劣なことをしない。明るく、弱い者を助け、強い者をくじく任侠心を持ち、面目を保ち、江戸や東京を愛する人間であるべきというのである。また意気を持つことにこだわっている。露伴は『一国の首都』で「詩人および小説家達はややもすれば都府を罪惡の巢窟のごとくみなし、村落を天国の実現のごとく謳歌す」と切ってすてている。明治の同時代に人気のあった国木田独歩が明治32年（1899）に出版している「武蔵野」を意識していると思われる。ちなみに独歩はロシアのツルゲーネフに理解を示し、自然主義的

な田園風景を「武蔵野」に打ち出している。独歩はひっそりと奥まった田園生活こそが好ましいと言っているのである。露伴はこのような隠居然とした生活には断固反対なのである。文学者といえども国家、社会に関わりを持ち、洗練された生き方を目指し善美を求めべきであると強調する。そこでこの『一国の首都』でも自然主義の方向を向いている当時の詩人や作家を指弾しているのである。

4 露伴の『一国の首都』

露伴は明治新政府を構成する薩、長、土、肥、出身の幹部の所業に鋭い指摘をしつつ、具体的な現状改造の考え方、方法を展開していくのである。以下は露伴の主張の要点である。

江戸から東京になってまだ30年しか経っていないが、何かの変化が出てきてもよいはずである。

江戸に比べて東京は、形のある物すなわち建物、道路、役所、河など進歩したが、無形の物、人情、公德心では墮落している。

江戸から東京が変わって、無形の道義心が世界にも共通して物質の進歩に反比例して廃れている。

東京が江戸にくらべて風紀が頹廢していれば、都民は東京にそして全国に罪を負う。そして江戸の破壊は、腐敗や崩壊、政治の圧力から生じている。

5 薩、長、土、肥、の武士の無自覚

東京を建設したのは表面上は明治政府である。優勝者の立場にある薩摩、長州、土佐、肥後の武士は、東京に対する自分たちの立場は手の先ほども自覚していなかった。一方で政争を繰返し東京の非公認妻である妾、つまり「権妻」を日常化するまでに姦淫を世間に広げていった。木戸孝允、大久保利通の存命が長ければ、世の中は変わっていたかもしれない。東京は、江戸末期の墮落から東京誕生当時の愛情のない人々に託された悲劇をこうむったのだ。河竹黙阿弥の戯曲『金の世中』が後世に残るようになったのも都民が首都を愛そうと自覚しない弊害である。都民生活でも花札賭博が流行し、首都の真面目な人々が、破落戸（ごろつき）の行動や精神をまねるようになっていた。明朗、常識的な人には不必要な待合茶屋が神社、仏閣より多くなった。

6 風俗が支配

江戸時代には足袋も履けなかった芸妓を、良家の子女が手本とするようになった。劇も残酷劇や感情に訴える事実劇が行われている。有名人は金の奴隷、得体のしれない壮士、幼女は少年の俳優に憧れ、青年が元禄時代を慕い、子どもがたばこを喫い、妖婦は名誉ある人の集會に出て高い席で来賓と親しくしている。新聞はただの商品となり、教育は営業、生徒は教師を雇い人のように見るし、公共事業の汚職はしばしば発覚するようになった。非道徳な重罪人が大

目にみられ、純朴で理屈に疎い夫婦が酷評されたりしている。僧侶は自分から教養や法規を蔑視していると認め、読経を商売にしている。教理不明の宗教が中流以下の人々に流行し、占いをするものが一家を構えている。媚薬のようなものが新聞に宣伝され、過ちを改めようとするとも友達を失う。悪行でもやり遂げる。狡猾に上手に奪えば褒められる。このようなことはすべて首都を愛そうと自覚しないものが醸し出すものだ。

では未来に希望をもって東京を首都にふさわしいようにするにはどうしたらよいか。首都を、全国の指導者、代表者、最善の善美に溢れる天皇の居場所にふさわしいところとし、国民の風俗や礼儀正しきの源泉で模範であるとするべきである。その答えはただ一つ“自覚”である。自覚とは真の智や徳や情で大きな力である。旧江戸幕府の良さ、とりわけ江戸ッ子気質を取り上げて、明治政府の治め方などを木戸孝允、大久保利通などの死にからめて批判する。

露伴も子規や白秋のそれぞれの故郷への思慕、郷土愛を基盤とした都市間比較、首都論とは共通である。自分の帰属していた旧江戸幕府にある重厚さ、武士道に見られる倫理、道徳、礼儀正しさに対し、明治政府の軽々しい責任のなさが残念であった。幕末の墮落が江戸時代を終わらせた。

7 『一国の首都』に見る首都機能のたたずまい

☆“自覚”が解決策

しかし新政府のもとでの庶民生活の激動、風紀の乱れ、金権主義は、有形の変化を評価しつつ無形への嘆息となって明らかである。その上で自覚こそがすべての解決策である。露伴の首都論の骨格はこの“自覚”にあるとあってよい。

☆理想社会

次にもとめられるのは、理想首都である。これは個人個人の知識の多少、意思の強弱によってあらわれるのであるからそれぞれによって異なるのは当然である。ところが同じ時代、環境にいるのであるから、無数の共通点があるので理想首都に対して少しばかりの相違があることはそれほど重要ではない。

☆東京を野原に戻したい人

東京を昔の野原にしたい人もいる。理想を唱え、実現しようとするのを無益な個人行動とみなしている。たとえば都市改造の区市改正を不要という人、鉄道や馬車は害が多いと反対する人もいる。最近、東京湾造を必要ないという人もいる。昔の秩父大宮平、相馬の雲省野などは詩歌ではよくとも、羨ましいところではない。武州の吉見、豆州の柏谷な竪穴式住居は自然に近いが誰もが東京をこのようにしたいとは思わない。世界の東京を追求するのは、冷静な知識からすれば妥当な判断、暖かな感情からみても極めて自然な要求である。

☆施設の規模

施設の規模を大きくしておき、将来を配慮しておくべきだ。

☆首都運営の内容

中央政府と首都の機能の境界をどうするべきか。府会、市会の義務と範囲をどうする。

各議員の選挙権、被選挙権の資格、員数の決定基準をどうするのか。区会、町会、村会、の規定をどう決めるのか。今後これらの機関が首都存続にてきしているか。

☆境界線の確定

畜産の飼育、屠殺、埋葬の方法もそれに関係する。首都の面積についても、建物を三階、四階と高くすることで、実質の富を増加させる。首都の面積は広いことではなく、有形、無形の富が大きい。

☆道路は曲線

一本道だけの町は、同じ戸数の円形、方形の町に比べて不便、不利益である。

☆首都内外の区別

首都の内外の区域を明確に分けることが首都の各種施設、実態にそった施設の運営にする。

☆区画と公共施設

区の区画、中央政府、学校、裁判所、区役所、警察署、遊郭、公園墓地、遊技場、劇場、芸妓の住居など、所在地は首都が許可基準を作って対応する。学校は周辺事情、風景と適合する場所にあることと、なるべくおおくの幼稚園を配置する。

☆交通機関、汚水、雨対策

道路を破壊する荷馬車、荷車、人力車の荷物を鉄道で運搬させる。積載量に正比例して、また車輪の太さに反比例して税率を課税する。汚水、雨水の排水を整備する。

☆水道水、下水

水源地を清潔で整備されたものにする。

清掃を除外しない規定を公表することを都民の世論として為政者に要求する。

下水すなわち汚水の排泄方法の完備は病気の伝播をさせないことから大切である。

☆塵芥、糞尿の処理

各家庭の塵芥、糞尿の規制をし、排除設備の建設をする。

☆理髪業・共同浴場

理髪業への行政指導が効果を上げている。公衆衛生への熱意があるが警察が指導していく。共同浴場銭湯が高温でなく、脱衣場が清潔でないと各種の病気伝染が起りやすい。共同浴場の病気の調査をする。

☆飲食物

飲食物の行政指導し厳罰にする。

☆火災

準巡査のような資格を与え、町に専属させ、防火防犯もさせる。緊急時には警察官の指揮下に入れる。

町内の鳶（とび）を活用し、誇りの持てる名称をつけて町内に専属させ、防火防犯をさせ警察の指揮下に置く。

☆警察

強盗は電信、電話の通報で防犯出来るようになった。強盗は首都中心部では少なくなった。反比例して窃盗、すり、誘拐、詐欺が繁華街、居住地で多くなった。防犯対策を特別に講ずる。

☆公園

都内 15 区の土地の広さ、100 余万人いて、上野公園と芝公園では足りない。

東京は東部に 1 ケ所、西部に 1 ケ所、中部に 1 ケ所の公園を配置する。

☆神社の改革案

境内を整頓し、伊勢神宮の様式とし、常緑の樹陰が永遠に神の権威、霊の威容を失墜しないようにする。神社の用地を利用し、幼稚園を設置し、その結果を公表する。

☆寺院・墓地・市場

寺院の数が多く繁華街にあることは都に利益をもたらさない。代替地を与えて外部に移転させる。墓地は拡張させず放射状に外に向かう延長は許し、都から遠ざかるようにし、墓地が都を囲むようなことは好ましくない。

魚市場、野菜市場など新設したい者がいる場合、慎重に調査し、同業者や近隣地への影響を配慮し、首都全体からの配置を計算して許可、不許可を決定する。

☆劇場の構造・品格

劇場の構造や立地を首都が干渉するのは無益である。構造については専門家が強風、大雪、豪雨、地震などに耐える構造かどうか判断する。

品格は劣悪であってはならない。客の気を惹こうとする企画や運営は許可するべきではない。

☆劇場の内容

演劇の内容がよいということは首都の男女の感覚、趣味の優美さや高尚さを表現するものである。劇の勧善懲悪を善としたりするものではない。文学の専門家に劇の善悪を聞くべきである。

☆遊人と壮士

遊人は一時の良民と関係がなく、社会も憎悪していない。準警察官にしても良い。

壮士は普段は良民に迷惑を与えないが議員選挙になると選挙権が行使出来なくなり、棄権するのが賢いような風潮をつくり、政治から切り離す。犯罪をおかしたものは退去命令をだす。彼らを政治家志望者にすることがあってもよい。

☆賭博と社会

賭博は社会がなくなっていくようにしていくべきである。花札の製造、販売は禁止、許可するときは重税を課すべきである。

以上が『一国の首都』の首都に関わる露伴がいうところの、首都の機能の佇まいについてである。

8 吉原遊廓

『一国の首都』の4分の1以上の頁が吉原遊廓に割かれている。この分量の多さについてはいろいろと説がある。しかし『幸田露伴の世界』⁽¹⁵⁾で井波律子の指摘している説に、解明のきっかけを求めたい。

露伴は電話修技学校を出て明治18年（1885）に電信技師として北海道余市に赴任する。3年間で義務づけられていたが、2年足らずで東京に帰る。明治20年、この時露伴は21歳。この間のことを井波律子氏は『幸田露伴—その生涯と中国文学』の中で、この余市時代に坪内逍遙の『小説神髓』を読んだこと、そして3年間の義務を果たさずに『突貫紀行』に記した経緯の中で、遊廓での女性との始末の問題があったのではないかと指摘している。この仮定としての遊廓での悶着があれば、吉原遊廓にかかわる紙面が多いことにも納得できる。しかしそれにしても露伴が個人の経験したことだけで4分の1以上の紙面をかけるとは思わない。もとより個人感情はありながらも別な面も考えてみたい。

9 大衆化社会への警告

それは『一国の首都』の始まりに、“江戸ッ子”とか“自覚”にこだわったこと、すなわち正統な考え方をしっかりと押さえ込んでおきながら一方で人間の欲望の果である遊郭を執拗に取り上げたのではないかと推量する。そのように『一国の首都』を構成することで、はじめに徳川幕府崩壊の経緯、しまいに現実の風俗の乱れなどを訴え、中間に真面目な首都改造を配したのである。

ここには昭和4年（1929）にスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットがあらわした『大衆の反逆』と軌を一にする、上げ潮のように登場する大衆の姿がある。無作法で押さえの効かない、大衆の際限のない欲望追求の時代の象徴としての遊廓と詳説しているのである。いま世は情報化社会にあって、まさに大衆のなすままの日本、世界である。この露伴の『一国の首都』が訴える国家、社会、個人のあり様は立ち止まって考える価値がある。露伴は誇りと自覚を持つ首都の住民、すなわち都民と国民の成長を求めるのである。

露伴は昭和12年（1937）に第1回文化勲章を受ける。彼は東京會館の祝賀会でこのように挨拶している。「いったい芸術というものは世間から優遇され、多くの人に認識されぬから成立するものではない…方々から何ももうされなくても良いのだし、またお祝いされなくても良いかと存ずるのであります。」といい、権威のどれほどをも歯牙にもかけない人柄であった。これからもさらに露伴については文学的な接近、幸田文、青木玉をつうじての解明もあるかもしれない。しかし、こと江戸から東京への自らの旧幕臣としての系譜への無念も含め、首都東京の有り様については、ひとこと江戸ッ子を自覚し自我同一性（アイデンティティ）を持つ露伴がぜひとも世に問いたかった問題であった。

まとめ

いままで検討してきた正岡子規、北原白秋、幸田露伴の首都論あるいは未来の東京を以下のように表にしてみる。(※表1)

【表1】本文掲載順

	時期	出典	主張	論旨	着眼方向
正岡子規	明治32年	『筆づくし』 『400年後の東京』	松山と東京の比較評価。 東京の未来像を指摘する。	郷土を愛し、東京を愛し、観念的、情緒的である。	内向きに世界平和を目指す。
北原白秋	大正11年	『柳河首都建設論』	首都柳河を実現する。	郷土愛のある具体的提案。 アジアの指導者たる柳河をつくる。	外向きに東アジアへの影響力を発揮する。
幸田露伴	明治32年	『一国の首都』	自覚をもった江戸っ子、都民が、日本の、世界の、東京を建設する。	具体的に建築の高層化、上下水道、公共衛生などを推進する。	旧幕府の江戸っ子の気風で東京をつくる。

旧幕府のもとで地方の藩を中心に生活し、構造的には城を中心にして自我同一性が徹底されていたことが共通している。東京と比較はするが首都を松山とまでは考えない正岡子規、積極的にアジアの中心としての柳河首都を構想する白秋、当然のこととして江戸265年の延長線で東京を首都として盛り立てたい露伴。かつて明治、大正、昭和の地方都市では程度の差はあっても正岡的、北原的なわが町の評価があった。その極端な事例が東京に奠都されて身の置き場のなくなった京都がある。心理的な誇りとしての首都論がある。

いま日本人は出身県、出身校、などで自我同一性（アイデンティティ）を確認している。たとえば都市対抗野球大会、春夏の甲子園野球、プロ野球、プロサッカーの郷土愛などで勝負に一喜一憂している姿がある。これはこれからも継続するであろう。このたびの正岡子規、北原白秋、幸田露伴の首都論、都市論を調べてみて明治から大正にかけて極めて原初的な郷土愛が発展して三者の意識が温存、醸成されていったことがわかる。

注)

- (1) 幸田露伴著『一国の首都』1993 岩波文庫
- (2) 幸田露伴著『露伴全集』1954 岩波書店 第29巻「少年時代」
- (3) 佐々木克著『志士と官僚 明治を「創業」した人々』2000 講談社 50～51P.
- (4) 大石 学著『首都江戸の誕生』2002 角川選書 239～240P.
- (5) 『東京百年史』東京都刊 第2巻 67～68P.
- (6) 大石 学編『江戸時代への接近』2000 東京堂出版 三野行徳「幕府官僚と維新官僚」137～139P.
- (7) 江戸東京博物館刊『参勤交代—巨大都市江戸のなりたち』（財）東京歴史文化財団 139～154P.
- (8) 勝海舟著『勝海舟全集』1974 講談社 第4巻 424～426P.
- (9) 正岡子規著『子規全集』1975 講談社 第12巻 260～268P.

- (10) 正岡子規著『子規全集』1975 講談社 第12巻 277～294P.
- (11) 新藤東洋男著『北原白秋の都市計画論』1999 熊本出版文化会館 35～41P.
- (12) 新藤東洋男著『北原白秋の都市計画論』1999 熊本出版文化会館 25P.
- (13) 新藤東洋男著『北原白秋の都市計画論』1999 熊本出版文化会館 26P.
- (14) 西山松之助著『江戸っ子』2006 吉川弘文館 93～95P.
- (15) 井波律子・井上章一共著『幸田露伴の世界』2009 思之閣出版 7～8P.

(2013.9.25 受稿, 2013.10.25 受理)